

労働映画百選通信 No.21 2017.10

発行 ■ NPO法人 働く文化ネット 編集 ■ 清水浩之 〒101-0062 千代田区神田駿河台3-2-11 連合会館5F

労働映画鑑賞会

働く文化ネットでは、毎月第2木曜日に労働映画鑑賞会を開催しています。お気軽にご参加ください。

第42回 子どもたちの夢と現実 【2017年10～11月期】統一テーマ：子どもたちと仕事

- ・開催日：2017年10月12日(木)18:00～(参加費無料・事前申込不要)
- ・会場：連合会館 2階 201会議室(地下鉄 新御茶ノ水駅 B3出口すぐ)

機関車小僧

1949年/45分/白黒 製作/東宝教育映画

監督/野田真吉 出演/二口信一、亘 幸子、大町文夫、原 緋紗子 ほか

戦争で両親を失った少年・明は、父のような機関士になる夢を持っていた。逆境にめげず、周囲の人々に支えられてたくましく成長する姿を描く児童劇。



ポンせんべい

1950年/23分/白黒 製作/日本映画社 賛助/労働省

監督/桑野 茂 原作/北川千代 出演/渡辺孟代、田中筆子、前田正二 ほか

漁村に住む少女・富子は、家計を助けるため奉公に出ようとするが叶わず、兄が始めたポンせんべい屋を手伝うことに。子供の就労問題を描いた児童劇。

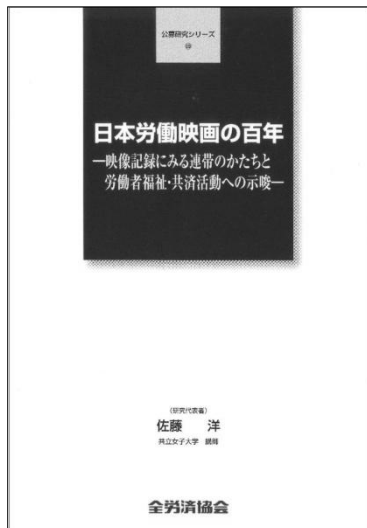


【DVD】ケー・シー・ワークス「昭和こどもキネマ」第2巻『機関車小僧』ほか 第6巻『ポンせんべい』ほか

日本の労働映画百選 <http://hatarakubunka.net/>

『明治の日本』(1897)から『下町ロケット』(2015)まで!“働く姿”を描いた百本をセレクト

「日本労働映画の百年」報告書が完成



働く文化ネットと協力関係にある映画研究者たちによる『日本労働映画の百年—映像記録にみる連帯のかたちと労働者福祉・共済活動への示唆』

(全労済協会公募研究シリーズ)が完成しました。

本編51頁：労働映画についての考察研究編

別冊96頁：1895年～2016年の日本の労働映画1,468作品目録

ご希望の方は下記の要領でお申し込みいただければ、送料実費でおわけします。

◇申し込み方法

「『日本労働映画の百年』報告書の送付希望 /

希望送付先の宛名<郵便番号、住所、氏名>

を記載したメモ(様式は自由)と郵便切手360円分(レターパック代)を同封して、下記までお申し込みください。

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-2-11 連合会館5F
NPO法人 働く文化ネット

【上映情報】労働映画列島！9～10月 ※《労働映画列島》で検索！ <http://d.hatena.ne.jp/shimizu4310/00171003>



◎新作ロードショー

ジュリーと恋と靴工場 《9月23日(土/祝)から 東京 新宿ピカデリーほかで公開》
閉鎖の危機に陥った靴工場。女性職人たちは“戦う女”と呼ばれる赤い靴を復活させようとする。社会的なテーマをポップに表現したミュージカルコメディ。(2016年 フランス 監督/ポール・カロリ、コスティア・テスチュ) <http://julie-kutsu.com>

ハットンガーデン・ジョブ

《9月23日(土/祝)から 東京 ヒューマントラストシネマ渋谷ほかで公開》
2015年、ロンドンの宝飾店街で起きた強盗事件を映画化。犯人は平均年齢60歳以上、年金受給者もいたことでも話題を呼んだ事件の顛末を描く。(2017年 イギリス 監督/ロニー・トンプソン) <http://www.at-e.co.jp/www/2017/>



ドリーム 《9月29日(金)から 東京 日比谷 TOHOシネマズシャンテほかで公開》
1960年代初頭のアメリカ。人種差別や偏見と闘いながら、初の有人宇宙飛行計画を陰で支えたNASAスタッフの黒人女性たちを描く伝記ドラマ。(2016年 アメリカ 監督/セオドア・メルフィ) <http://www.foxmovies-jp.com/dreammovie/>

夜間もやっってる保育園 《9月30日(土)から 東京 ポレポレ東中野ほかで公開》
東京・大久保で24時間保育に取り組む園をはじめ、日本各地の夜間保育園取材したドキュメンタリー。現代の家族の姿と働き方を映し出す。(2017年 日本 監督/大宮浩一) <http://yakanhoiku-movie.com/>

◎名画座・特集上映

【東京/札幌/名古屋/大阪/福岡/広島】9/30～11/12「**国連UNHCR難民映画祭2017**」
…はじめてのおもてなし(ドイツ)/希望のかなた(フィンランド)/市民(ハンガリー)/他
▼北海道・東北

【山形市中央公民館/ほか】10/5～12「**山形国際ドキュメンタリー映画祭2017**」…
また一年(中国)/機械(インド)/植民地的誤解(カメルーン)/われら山人たち(スイス)/他
【青森県立美術館】10/6～14「**たむらまさきの眼**」…竜馬暗殺/夢の祭り/他

▼関東・甲信越
【新潟 シネ・ウインド】9/23～10/6「**佐藤真が遺したもの**」…阿賀に生きる/花子/他
【東京 池袋 新文芸坐】9/28～10/7「**ヴィスコンティとイタリア映画の傑作たち**」
…自転車泥棒/甘い生活/ルートヴィヒ/揺れる大地/他

【東京 シネマヴェア渋谷】10/14～11/3「**新東宝のもっとディープな世界**」
…魚河岸帝国/女の一生/背広さんスカートさん/闘争の広場/他
【東京 京橋 フィルムセンター】10/17～22「**シネマの冒険 闇と音楽 2017**」
…東京行進曲/ふるさとの歌/明日天気になあれ/熊の出る開墾地/他

▼東海・北陸
【中津川 東美濃ふれあいセンター】10/7・8「**三國連太郎を語る映画祭**」
…襤褸の旗/息子/三たびの海峡/につぼん泥棒物語/他
【岐阜市文化センター】10/14～12/2「**第39回 ぎふアジア映画祭**」
…ラサへの歩き方(チベット)/神なるオオカミ(中国)/歌声にのった少年(パレスチナ)/他

▼関西
【大阪 九条 シネ・ヌーヴォ】9/30～10/6「**香港・マカオ インディペンデント映画祭**」
…乱世備忘 僕らの雨傘運動/河の流れ 時の流れ/出稼ぎの女たち/他

▼中国
【島根県内10会場】9/30～11/26「**第26回しまね映画祭2017**」
…五島のトラさん/湯を沸かすほどの熱い愛/この世界の片隅に/南極料理人/他
【広島市映像文化センター】10/1～29「**広島ゆかりの映画人**」
…綴方教室/鯨神/ Shall we ダンス? /母のいる場所/他

▼四国
【高知あたと劇場】10/14～20「**渡瀬恒彦追悼**」…狂った野獣/仁義なき戦い 代理戦争

▼九州・沖縄
【那覇 桜坂劇場】9/23～26「**川島雄三・岡本喜八特集**」
…洲崎パラダイス 赤信号/雁の寺/日本のいちばん長い日/他

【直方市内6会場】10/13～15「**直方映画祭2017**」…花に嵐/天然コケッコウ/他

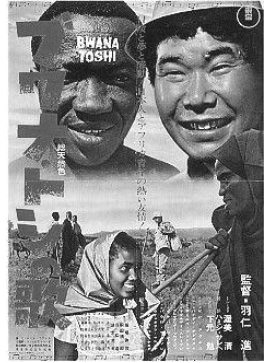


【作品ガイド】『ブワナ・トシの歌』

1965年/98分/カラー 製作/東京映画・昭和映画 配給/東宝
 監督/羽仁進 構成・脚本/羽仁進・清水邦夫 原作/片寄俊秀 撮影/金宇満司
 音楽/武満徹 主演/渥美清 下元勉 ハミン・サレヘ ビビ・アグネス

(2017年7月・シネマヴェーラ渋谷「羽仁進レトロスペクティブ 映画を越境する」で上映)

《日本から来る学術調査隊のプレハブ住居を建てるため、一人でアフリカにやってきた建築技師の大岡敏男＝トシ。トシが一人で奮闘していると次第に近隣の若者が集まり、手伝ってくれるようになる。ところが、彼らの悠然とした生活リズムでは家づくりははかどらない。苛々が募ったトシは、ある日とうとう助手のハンミを殴ってしまう……》



《原作者の片寄俊秀(1938年生まれ)は建築学者・都市計画家。1961年から62年にかけて、今西錦司隊長率いる京大アフリカ類人猿学術調査隊の設営担当として、タンガニーカ(現・タンザニア)調査に参加。その後、大阪府の技師として、千里ニュータウンおよび泉北ニュータウンの造成を担当した。》

アフリカで文化の違いに四苦八苦しただモーツ日本人の、ほろ苦い奮闘記

文:若木康輔

日本で観光目的の海外渡航が自由化され、海外旅行という新しいレジャーが生まれたのは東京オリンピック開催と同じ1964年のことです。しかし、仕事や留学でも外貨の持ち出し額は制限されていました。多くの人にとって異国は、まだまだ遠い夢。そんな時期に東アフリカの奥地で半年近いロケーションを行ったのが『ブワナ・トシの歌』です。当時テレビで人気沸騰、秒単位で笑わせるスタジオの申し子・渥美清が、演技経験の無い現地の人々との共演に挑戦した異色の名品です。

渥美演じるトシの、アフリカでの仕事は思うようにはいきません。働き手としては頼りないハンミたちの鷹揚さに、何度となくカリカリする毎日。寅さんに親しんできた僕らが今この映画を見ると、トシの硬い顔に渥美清本人が不意に顔れてドキッとさせられます。トシが片言のスワヒリ語でコミュニケーションを試みる多くの場面は、渥美自身が裸になって相手にぶつからなければ芝居が成立しない状況で撮影されているためです。虚実の境に身を置いているから、文化の違いを越えたふれあいが生まれる時の温かみも増す。この映画にはそんな、懐の大きな魅力があります。

労働映画としても見応えは十分。トシとハンミたちが殴打事件を解決してプレハブ住宅を建てるプロセスには、一緒に汗を流す共同作業の喜びはもちろん、海外事業や雇用関係の教訓に出来そうな箇所が幾つも盛り込まれています。

ただ……自給自足できている現地の人々にしてみれば、トシをブワナ(雇い主)として西洋的な家を建てること、いや、撮影への参加自体が余剰の遊びなので、完成したところでトシほどの達成感は無し。見ていても実はあまりというか、ほとんど盛り上がりません。ポレポレ(ゆっくり)のペースに映画が呑まれて、肝心のクライマックスさえ淡々となってしまう。そうすると、大体トシはなんでこんなに熱心に働いたのだろう?という疑問が沸き出てきます。

渥美自身の奮闘で人間味がよく出ているものの、脚本上のトシの情報はごくわずか。役職も具体的な納期もハッキリしないし、監視する上司もないというのに「日本人」の責任感によってひとり空回りしていく、多分に象徴化された人物です。周囲に合わせて適度にサボりながらのほうがトシは仕事をスムーズに進められたのかも、と思わせる皮肉があります。つまり家の完成が劇的にならない結果こそが、効率とスピードを追い求めた当時の日本への卓抜とした問い掛けとなっているのです。かなりの離れ業を達成した映画と言えるでしょう。

監督は羽仁進。授業に退屈した子どものあくびや不良少年の無駄話などの無為の時間にこそ生の輝きを見出し、戦後の日本映画にコペルニクス的発見をもたらした若き天才にとってこの映画は一つの到達点であり、大きな転機となりました。僕らの世代の多くは、アフリカの動物をテレビで紹介する面白おじさんとして羽仁進を知ったのですが……その原点です!

若木康輔(わかきこうすけ)……

1968年生まれ。番組構成作家、ライターとして労働中。今年(2017年)はフリーランスとなって22年目です。

【労働映画のスターたち】第24回「浅丘ルリ子」 文：百永良武

156センチ、35キロ。孤高のおひとりさま「やせダンブ」の生き方に学ぶ！

1955年デビュー、女優生活62年！今年にはNHK大河ドラマ『おんな城主 直虎』、テレビ朝日の昼帯ドラマ『やすらぎの郷』に相次いで出演し、新たなファン層を開拓した浅丘ルリ子さん。『直虎』では今川家の“女戦国大名”寿桂尼を、一方の『やすらぎの郷』では“お嬢”と呼ばれる往年の大女優を演じ、「コワ可愛い」魅力を発揮している。

10代の頃は、小林旭、赤木圭一郎など男性スターに守られる「可憐」な少女。20代から30代にかけては、都会に生きる「華やか」な美女。40代からは美しさとともに「たくましさ」をレパートリーに加え、60代以降は、こうした特徴をすべて持ち合わせた、孤高の「おひとりさま」像を確立していった。「男はつらいよ」シリーズの歴代マドンナの中でも特に人気が高い「リリー」は、ルリ子さんだからこそ成立したキャラクターで、「女が幸せになるには、男の力を借りなきゃいけないけども思ってるのかい？笑わないでよ！」(『寅次郎相合い傘』1975)という名セリフを生み出した。昭和・平成の女性史としても興味深い彼女のお仕事を、労働映画の視点で迫ってみよう。

1940年、旧満州の新京(長春)生まれ。14歳の時、映画『緑はるかに』(1955、監督・井上梅次)のオーディションに合格。原作小説の挿絵を担当していた画家・中原淳一が直々に選んだといわれる「瞳の大きい美少女」は、製作再開から間もない日活の貴重な専属女優として、多くの作品に出演するようになる。『絶唱』(1958、滝沢英輔)、『女を忘れる』(1959、舛田利雄)など小林旭との共演作が好評で、アキラの「渡り鳥」や「銀座旋風児」などのシリーズでヒロイン役を歴任。石原裕次郎をはじめ男性スター中心の日活アクションでは、女優は本来「お姫様」に過ぎなかったが、彼女が先輩の北原三枝や芦川いづみ、後輩の吉永小百合や松原智恵子と違ったのは、「男まさり」の度胸溢れるお嬢さんというキャラクターを独自に作り出し、ヒロインも自ら積極的に行動するようにしたことだろう。アキラと丁々発止の口喧嘩を繰り広げる『東京の暴れん坊』(1960、斎藤武市)や、風来坊の裕次郎を追いかけるキャリアウーマンに扮した『憎いあんちくしょう』(1962、蔵原惟繕)、エースのジョー＝戸川錠と組んだアクションコメディ『危いことなら銭になる』(1962、中平康)で淫漑と動き回る姿は必見。日活ムードアクションの金字塔『赤いハンカチ』(1964、舛田利雄)では、裕次郎、二谷英明との「三角関係」を成立させる存在感を備えた、堂々たる主演女優に成長していた。

「おとなの女」に変貌した後も、『愛の渇き』(1967、蔵原惟繕)、『私が棄てた女』(1969、浦山桐郎)、『戦争と人間』(1970、山本薩夫)などで好演するが、ホームグラウンドの日活が斜陽期に入り、活動の場を他社作品やテレビに移す。男はつらいよ第11作『寅次郎忘れな草』(1973)では当初、北海道の酪農家の役が用意されていたが、山田洋次監督に「私、こんな細い腕で力仕事ができるでしょうか？」と訴えたところ企画が変更され、旅行の歌手・リリーという名キャラクターが生まれた。「おひとりさま男子」寅さんの生き方を理解できる「同志」のリリーは、寅さんのみならず多くのファンにも愛され、最終作『寅次郎紅の花』(1995)まで4回登場した。

私が最初にルリ子さんを知ったのは小学生の頃。日本テレビが土曜夜9時に放送していた「グランド劇場」で、やたらに長い題名のドラマを放送していた時期があり、その第一弾が『二丁目の未亡人は、やせダンブといわれる凄い子連れママ』(1976)だった。夫に先立たれたヒロインが、夫の連れ子とともに上京し、当時急成長していたスーパーマーケット業界で働き始めるホームドラマ。身長156センチ、体重35キロ(公称)という華奢な身体だが、筋の通らないことがあれば、たとえ相手が客であろうと威勢の良い啖呵で立ち向かっていく姿が、とにかくカッコよかった。優柔不断な文学青年(石立鉄男)、粗野だが純情な兄弟(山崎努&原田芳雄)など男性陣との掛け合いも面白く、40年経った今でも忘れられない(横浜の放送ライブラリーに行けば見られます!)。このドラマ以降、我が家では彼女のことを「やせダンブ」と呼び続けている。

1980年代からは読売テレビの鶴橋康夫ディレクターと組んで『魔性』(1984)、『最後の恋』(1988)、『雀色時』(1992)など、女性の生き方をテーマに据えた野心作を連発。70代に入ってから、檜山節考の後日譚を描いた映画『デンデラ』(2011、監督・天願大介)で、山に捨てられた老女が熊と闘う姿を熱演した。まさに孤高の「おひとりさま」道を歩み続けるルリ子さん。これからも多くの後輩女性に勇気を与える作品を期待しています！

参考文献：『私は女優』浅丘ルリ子 (2016年、日本経済新聞社)



緑はるかに (1955)



憎いあんちくしょう (1962)



男はつらいよ
寅次郎忘れな草 (1973)



二丁目の未亡人は、
やせダンブといわれる
凄い子連れママ (1976)



すいか (2003)



デンデラ (2011)